

英語における名詞前位修飾表現の諸相

佐々木 一 隆

はじめに

本稿の目的は、英語名詞句において主要部名詞を前から修飾する様々な表現について、理論的な考察を念頭に置きながら事実観察を中心に論じることにある。具体的には、次の例の下線部が主要部名詞 *loss* に対する前位修飾表現である。

(1) If someone has a stroke and resulting (partial) loss of language, their speech may be so replete with mistakes that they are hard or impossible to understand. (McGilvray 2005: 26)

この下線部のうち特に *resulting* の意味を正確に解釈するには、第一に *stroke* と *resulting (partial) loss of language* が等位接続されていて、全体で時間経過に沿った出来事を表し、「経験」を示す動詞 *has* の目的語となっている点を理解する必要がある。すなわち、名詞の前位修飾表現の正確な解釈には文脈が必要である。かくて、(1) の全文解釈は「もしもある人が脳卒中を起こし、その結果として言語が（部分的に）失われたとすると、その人の話しことばには誤りが多々見られるようになるため、その人のことばを理解することが困難になったり不可能になったりする可能性がある」となる。第二に、不定冠詞の *a* は、指定部として等位接続されている名詞句の残りの部分全体 (*stroke and resulting partial loss of language*) にかかっており、*stroke* のみにかかるのではない。第三に、等位接続において最初の等位項からの談話の流れという観点から第二等位項 *resulting partial loss of language* に焦点を当てると、この表現は「脳卒中の結果言語の部分的喪失が生じた」と解釈され、名詞の前に現れている表現 *resulting* は単なる修飾語句とは考えにくく、ある種の主要部ないし述詞に格上げされているとも考えられる。さらに、名詞句全体の中で主要部名詞が2つ等位接続されており、このことが句には主要部が1つだけ存在

するという考え方とどのような折り合いが付けられるのであろうか。

本論文では、こうした事例について、句構造、意味解釈、ディスコースの観点から論じることにする。順序として、まず第Ⅰ節で前位修飾表現の事例をいくつか見てから、第Ⅱ節ではそのような事例が示唆する理論的な意味合いについて触れる。最後に結語を述べることにする。

Ⅰ. 名詞に対する前位修飾表現

本節では、英語の名詞前位修飾表現がまず等位接続されている構造に現れる場合について、次に複合語と関わる場合について観察する。さらに、前位という位置がもつ固有の意味についても考察する。最後に、修飾と被修飾との関係が通常とは「逆」になる場合を見る。

1. 等位接続と名詞前位修飾表現

以下の(1)～(3)の下線部は、何らかの意味で等位接続構造に見られる名詞前位修飾表現である。

(1) については「はじめに」ですでに述べているので、ここでは説明を省略する。

(1) If someone has a stroke and resulting (partial) loss of language, their speech may be so replete with mistakes that they are hard or impossible to understand. (McGilvray 2005: 26)

(2) の下線部は「政治的で見たところでは民族誌的でもある（違い）」という意味である。最初の形容詞 *political* だけでは不十分な説明を二番目の形容詞 *ethnographic* を付加的に添えることによって補足し、等位構造全体が主要部名詞 *distinction* を修飾している。

(2) What has been totally ignored in this respect is the political and apparently also ethnographic distinction,

which Kachru (1983) so aptly captures, between the ‘Inner Circle,’ the ‘Outer Circle,’ and the ‘Expanding Circle.’ (Coupland 2010: 48)

これは修飾表現としての二つの形容詞が等位接続されている例であり、特に最初の形容詞があるために、二番目の形容詞の直前に接続的副詞 *also* が現れている点が興味深い。

(3) の下線部は「認識論的に見れば互いに異なる、異文化間的で通文化的な（職場の会話に関する研究）」という意味を表しており、類義語どうしの形容詞 *intercultural* と *cross-cultural* が等位接続されて後続する主要部名詞 *studies* を修飾している。

(3) This survey of world Englishes and global commerce may read as something of a double-edged research agenda. On the one hand, there has been limited recent work on Outer- and Expanding-Circle varieties of Englishes in commercial and professional domains of use, and so the epistemologically distinct intercultural and cross-cultural studies on professional discourse may stamp out territory for expanding the empirical and theoretical framework of world Englishes. On the other hand, cross-cultural and intercultural studies rarely devote serious attention to multilingual creativity in either intranational and international arenas. (Kachru et al. 2009: 621)

この例では、等位接続されている二つの形容詞が類似の意味ではあるが認識論的に異なることを説明するために、*epistemologically distinct* という解説的修飾語句を等位接続形容詞 *intercultural* and *cross-cultural* の前に補足的・累積的に添えている。

2. 複合語と名詞前位修飾表現

この2節では、何らかの意味で英語の複合語が名詞前位修飾表現に関わる例を観察する。

(4) の下線部は *give and take* という（等位接続に由来する）複合名詞に対して形容詞の *constant* が前位修飾しており、「絶えず行われる対等のやりとり」という意味を表す。

(4) In his perceptive and influential study, the anthropologist Bronislaw Malinowski (1884-1942) described the Trobriand Islanders in a way perhaps apt for human kind as a whole: “The whole of tribal life is

permeated by a constant give and take” (Malinowski, 1922: 167). Give and take in commerce is crucial to survival, success, and enrichment, and, for many, English plays an increasing role in it. At the same time, language itself is a symbolic good with its own principles of give and take. (Kachru et al. 2009: 620)

この下線部の出自については、もともと *give and take* という動詞慣用句に *constantly* という副詞の修飾語が添えられ、それが全体として複合語として名詞化された結果生じたと考えられる。こうした名詞化の関係で、修飾語の副詞 *constantly* が形容詞 *constant* に「変化」していることに注意されたい。

(5) の下線部は「その主構成素どうしの順序に関する様々な異形」という意味であり、修飾語句の *main constituent order* 自体が複合語で、この複合語が後続名詞の *variations* を修飾している。

(5) As for the rarer verb-initial order, this is found in Pilipino (also known as Tagalog), the national language of the Philippines (Schachter 1987). Don’t worry about the unfamiliar glosses. The main thing is that the verbs *magaalis* ‘will take out’ and *nakita* ‘saw’ come first in the sentences.

(11) *Magaalis* [ang bata] [ng laruan] [sa kahon].

AT:will.take.out TRIG child PAT toy DIR box

‘The child will take out the toy from the box.’

(12) *Nakita* [ng Juan] [si Maria] kahpon.

PT:PERF:see ACT Juan TRIG Maria yesterday

‘Juan saw Maria yesterday.’

After this brief look at the main constituent order variations, I should point out that we have only been talking about the most common or neutral order in each language. As a matter of fact, almost all languages of East and Southeast Asia allow some variation in the constituent order of a simple sentence. It is often possible to swap around the order of the subject and object: that is, to put the object first in order to focus some extra attention on it (in some languages, this kind of switch-around is accompanied by some other grammatical changes as well). Generally speaking, the languages of East and Southeast Asia tend to have a more flexible and “expressive” word order than English. (Goddard 2005: 7-8)

この例では、主語・動詞・目的語などの文における主構成素 (main constituent) が order と組み合わせられて複合名詞を構成している。

3. 名詞前位修飾表現がもつ位置固有の意味

この3節では、名詞修飾表現が主要部名詞の前に現れるという位置が有する固有の意味について観察する。

Sasaki and Yagi (2003: 614) によれば、(6) の下線部のような名詞前位修飾表現がもつ位置固有の意味は “characterizing” (特徴づけ) と “lasting” (永続性) であり、a particular equivalence or difference is assumed という陳述文の下線部の述詞がもつ “temporary” (一時性) という意味とは対比される。

(6) Each of the chapters that follow attacks a particular assumed equivalence or difference.

(Bolinger 1977: 5)

したがって、この下線部は「一般的に定着している (同義あるいは異義という考え方)」のように解釈され、前位修飾表現の assumed が主要部名詞の equivalence や difference に対して特徴づけや永続性を示している。

同様に、(7) の下線部も「すでに全国に普及している (単言語主義)」と解釈され、前位修飾表現の nation-wide が主要部名詞の monolingualism の特徴づけや永続性を示している。

(7) What has been totally ignored in this respect is the political and apparently also ethnographic distinction, which Kachru (1983) so aptly captures, between the ‘Inner Circle,’ the ‘Outer Circle,’ and the ‘Expanding Circle.’ From the point of the view language vitality, the usage of English as a vernacular in the ‘Inner Circle’ must be distinguished from usage as an official language and as an important lingua franca of the intra-national elite in the ‘Outer Circle,’ as well as from its status as a foreign lingua franca, used for communication with outsiders by nationals of the ‘Expanding Circle.’ It is the vernacular function of English in places where it has also prevailed as the dominant or only language of the economy that has fostered nation-wide monolingualism. Both in the ‘Outer Circle,’ and in the ‘Expanding Circle’ multilingualism has been the norm; English is still

far from evolving into a lingua franca of the majority; and the fear that it will drive indigenous languages to extinction remains an unsubstantiated myth. (Coupland 2010: 48)

4. 修飾部と被修飾部の逆転

ここで言う修飾部と被修飾部の逆転は Kajita (1977: 47-59) が指摘している Head-Nonhead Conflict (主要部と被主要部の衝突) に類似する現象である。この現象は、概略、句における通常の被修飾部としての主要部が少なくとも意味的に格下げされ、その代わりに本来修飾部とされるものが「主要部」として格上げされることをいう。実は、「はじめに」で見た resulting loss of language の例は、resulting が単なる修飾部とは考えにくく、「主要部」に格上げされていることを示唆しており、修飾部と被修飾部の逆転が生じている可能性がある。

(8) の実線で示した通常修飾部と考えられる growing が通常被修飾部と考えられる fear との間でこうした逆転現象が顕著に現れ、growing は完全に「主要部」に格上げされている。なぜなら、the growing fear に後続する同格節の中を見れば、破線で示した is increasingly being used と is endangering … driving という進行形が現れていて、growing と見事に呼応しているからである。

(8) A concomitant of the myth of the emergence of a ‘global English’ has been the growing fear that, because it is increasingly being used as the lingua franca of western Europe and of the European Union, English is endangering the vitality of other continental European languages and driving western Europe toward monolingualism (Phillipson 2003, Hagège 2006). (Coupland 2010: 48)

以上を総合すると、(8) の文全体の解釈は「『グローバル英語』の誕生という神話に付随するものとして、英語が西ヨーロッパと欧州連合の国際共通語として使用される機会が増えてきているため、大陸にあるヨーロッパ諸語の存続を脅かしつつあり、さらに西ヨーロッパを単言語主義へと追いやりつつあるという恐怖が高まってきている」となる。

次の (9) の下線部 growing にも後続する名詞

literature との間に修飾部と被修飾部の逆転現象が生じており、この場合は破線で示した形容詞の比較級との呼応がその証左と考えられる。

(9) A dialog between the world Englishes framework and this growing literature on professional discourse will serve the greater understanding of the pluricentric evolution and uses of English in business. (Kachru et al. 2009: 621)

したがって、(9) の解釈は「この World Englishes の考え方や職業上の会話に関するこうした文献が増加していることが対話することにより、ビジネスにおいて英語が多能的で多様な使用がなされていることへの理解が広がっていくであろう」という具合になる。

II. 理論的示唆

この節では、句構造、統語構造と意味解釈、ディスコースという3つの視点から、英語の名詞前位修飾表現が与える理論的示唆を簡潔に述べることにする。

1. 句構造

Chomsky (1970) や Jackendoff (1977) などによる一連の X-bar theory によれば、一般に句には主要部が必ず1つ存在し、言語ごとに相対的順序は異なるが、その前後に指定部、補部、修飾部が現れうるとされている。

今回調査した英語の名詞句や形容詞句どうしの等位接続（例えば、a stroke and resulting loss of language や intercultural and cross-cultural など）の場合、一見すると1つの句に主要部が2つあり、問題となりそうだが、主要部の名詞や形容詞は等位接続されたそれぞれの名詞句や形容詞句の中に1つずつあるのだから問題ないとしてよいのであろうか。特に、互いに因果関係のある一連の出来事を示すような場合、a [stroke and resulting loss of language] の例から分かるように、指定部の不定冠詞 a は1回のみ現れて残り全体にかかっていると考えられる。こうした分析が妥当なら、主要部名詞は2つ（stroke と loss）あるが、指定部は1つのみであるという構造を何らかの形で捉える必要があると思われる。

2. 統語構造と意味解釈

一般に文の意味を決定するには、統語構造に基づいて意味解釈がなされ、その際には合成性の原理に沿って小さいものから大きなものへと意味計算を行ってゆき、最終的に文全体の字義どおりの意味が得られるとされている。そして、主要部と補部の関係、主要部と修飾部などの関係の違いにより、それぞれ意味合成の様式が異なり、異なる意味解釈が得られると考えられる。特に主要部と修飾部の関係において修飾部が主要部に先行する英語名詞前位修飾表現では、それが占める位置がもつ特徴づけと永続性の性質がどのように出てくるかを説明する必要がある。

また、統語上の修飾部が少なくとも意味上の被修飾部（または主要部）に格上げされると考えられる the growing fear…のような例では、格上げされた growing はどのような特徴をもつのであろうか。こうした点も追究する余地がある。

3. ディスコース

英語において名詞前位修飾表現がもつ諸特徴を扱うには、当然ながら文文法だけでは不十分であり、ディスコースの観点も必要となる。文から文への談話構造はもとより、同一の文の中でも、political and apparently also ethnographic (distinction) のような等位接続された構造の意味解釈にディスコースの観点が要求される。

このようなアプローチをより一般的に言えば、文法と語用論の有機的な連携ないし融合が必要であるということである。Dixon (2005), Ariel (2008), Feist (2012) などにはまさにこうした方針で行われている研究であり、言語能力のより詳細な解明には言語運用のデータがいっそう不可欠である。

おわりに

本稿では、英語名詞句において主要部名詞を前から修飾する様々な表現について、理論的な考察を念頭に置きながら事実観察を中心に論じてきた。具体的には、概略 a stroke and resulting loss of language の下線部が示すような名詞前位修飾表現に焦点を当て、句構造、意味解釈、ディスコースの観点から論じた。

第I節では、等位接続と名詞前位修飾表現、複

合語と名詞前位修飾表現、名詞前位修飾表現がもつ位置固有の意味、修飾部と被修飾部の逆転という4つの観点から事実観察を行った。第II節では、そうした事実が示唆する理論的な意味合いについて、句構造、統語構造と意味解釈、ディスコースという3つの視点から所見を述べた。

本稿では英語名詞前位修飾表現をめぐる限られた事実が言語理論に対してどのような意味をもつかについて少しだけ示唆を行った。さらなる事実調査とより厳密な理論的検討が必要であるが、これらについては別の機会に譲ることとする。

参考文献

- Ariel, Mira (2008) *Pragmatics and Grammar*. Cambridge University Press.
- Chomsky, Noam (1970) "Remarks on Nominalization", in Roderick A. Jacobs and Peter S. Rosenbaum (eds.) *Readings in English Transformational Grammar*, Georgetown University Press, pp.184-221.
- Dixon, R. M. W. (2005) *A Semantic Approach to English Grammar*, Second Edition. Oxford University Press.
- Feist, Jim (2012) *Premodifiers in English: Their Structure and Significance*. Cambridge University Press.
- Jackendoff, Ray (1977) *\bar{X} Syntax: A Study of Phrase Structure*. The MIT Press.
- Kajita, Masaru (1977) "Towards a dynamic model of syntax", in *Studies in English Linguistics* 5, pp. 44-76.
- Sasaki, Kazutaka and Takao Yagi (2003) "Prenominal Modifiers in English: An Outline of a Dynamic Analysis", *Empirical and Theoretical Investigations into Language: A Festschrift for Masaru Kajita*, Kaitakusha Publishing Company, pp. 612-618.

引用例文出典

- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*. Longman Group Limited.
- Coupland, Nikolas, ed. (2010) *The Handbook of Language and Globalization*. Blackwell

- Publishing Ltd.
- Goddard, Cliff (2005) *The Languages of East and Southeast Asia: An Introduction*. Oxford University Press.
- Kachru, Braj B., Yamuna Kachru, and Cecil L. Nelson, eds. (2009) *The Handbook of World Englishes*. Blackwell Publishing Ltd.
- McGilvray, James, ed. (2005) *The Cambridge Companion to Chomsky*. Cambridge University Press.

Aspects of Prenominal Modifiers in English

SASAKI Kazutaka

Abstract

The purpose of this article is to briefly describe a variety of expressions that premodify the “head” of the noun phrase structure in English by keeping their theoretical implications in mind. Let us take a look at an example of prenominal modifiers like the underlined portions shown below:

If someone has a stroke and resulting (partial) loss of language, their speech may be so replete with mistakes that they are hard or impossible to understand. (McGilvray 2005: 26)

In this example, if we wish to place a precise interpretation on one of the underlined portions (i.e., the prenominal modifier *resulting*) in particular, we will firstly have to understand the coordinate structure of *a stroke and resulting (partial) loss of language*, these two events taking place in sequence, and the whole noun phrase constituting the object of the verb *has*, which means “experience” in this case. Secondly, the indefinite article *a* ranges over the rest of the whole noun phrase consisting of a conjunction of the two “head” nouns (*stroke and resulting partial loss of language*), not *stroke* only. Thirdly, focusing on the second conjunct *resulting partial loss of language* from the viewpoint of progressive discourse from the preceding first conjunct *stroke*, we can interpret it as something like *partial loss of language happening as a result of the stroke*, which indicates that the prenominal expression *resulting* is no longer a modifier but has upgraded itself to a kind of “head” or “predicate” of this event nominal “clause”. Thus, in order to precisely interpret such prenominal modifiers, we need to grasp their structural and semantic characteristics in conjunction with contextual information.

This article deals with some in-depth observation of adjectival expressions concerning premodification given above—in terms of syntactic structure (including phrase structure), semantic interpretation, and contextual information. In section I we observe certain English prenominal modifiers cited from the literature on languages and linguistics, and then in section II we consider their theoretical implications. Finally, we make concluding remarks.

(2013 年 7 月 16 日受理)